公開シンポジウム「生物多様性からみたワイルドサイエンス」

**開催趣旨**

私たちは、生物多様性保全をより身近なものとしてとらえ、野生動物と人の暮らしを

一体として守りたい。今回の新型コロナウイルス問題についても、生物多様性の

進化史を遡って考えることが重要である。本シンポジウムでは、目に見える

大型動物の保全から細菌、ウイルスなどを含んだ生物の進化史的なつながりを概説し、

関連省庁、生き物を目の当たりにしている飼育繁殖施設、農村や生産者、

それらをつなぐ研究者の、実感を伴う議論によって、総合科学として自然誌科学を

野生動物管理に活かす枠組みに向けた連携をはかる。

**開催日時：** 2022年 2月26日（土）13:30～17:00

**場所：** オンライン

**プログラム**

**13：30　主催者挨拶**村山　美穂（日本学術会議第二部会員、京都大学野生動物研究センター教授）

**主賓挨拶**則久　雅司（環境省担当者自然環境局野生生物課長）

**趣旨説明**吉川　泰弘（岡山理科大学獣医学部長）

**13：40　「生物多様性とヒト」**

          吉川　泰弘（岡山理科大学獣医学部長）

生物とそのゲノム進化を基盤に「生物多様性と感染症とヒトの関係」を考える。進化を考える時に注意しなければならない点が3つある。

①地球環境の激変を無視し　　、生物のみで進化を解釈することはできない。

②40億年の生物進化を考える時には、実時間の長さで、その経過を考える必要が

ある。

③生物の分岐・多様性と相互作用、エネルギーや物質循環を考えるには生物の

定量的な存在比を考慮する必要がある。食物網、感染症網の中でヒトの存在を考えてみたい。

**14：10　「海洋ウイルスと地球環境」**

緒方　博之（京都大学化学研究所教授）

海洋では微生物が生態系の基盤として生命活動を支えている。そうした微生物も、日々ウイルス感染に苛まれている。海洋ウイルス学は、自然界におけるウイルスの役割は何かを「問い」として出発し、ウイルスが微生物生態系の安定と物質循環に寄与する因子であることを明かしつつある。最先端ゲノム解析から見えてきた海洋ウイルスに関する知見を紹介し、ウイルスが生物多様性の切り離せない「部分」であるという視点を提供したい。

**14：40－15：00　（　休憩　）**

**15：00　「サンゴ礁生態系とオニヒトデ大量発生」**

           安田　仁奈（日本学術会議連携会員、宮崎大学農学部准教授）

サンゴ礁生態系は、名前のある海洋生物のうちの32％が集中する高い生物多様性を有する生態系であるが、現在、75％以上のサンゴ礁域が脅かされている。その主因のひとつはサンゴ捕食者であるオニヒトデの大量発生である。オニヒトデの生態、特に大量発生の原因とも密接にかかわりのある初期生態について分かってきたこととともに、オニヒトデの大量発生がサンゴ礁生態系の生物多様性に与えるインパクトや生物の地域名があることの意味について考えてみたい。

**15：30　「鳥類、哺乳類の生息域外保全」**

           村山　美穂（日本学術会議第二部会員、京都大学野生動物研究センター教授）

地球上に哺乳類は約5000種、鳥類は約10000種が存在するが、世界自然保護連合（IUCN）の調査では、哺乳類の26％、鳥類の14％が、近い将来、絶滅する心配がある。野外の生息環境を守るのに加え、飼育下で繁殖させて野生復帰を目指す必要がある。私たちは、卵子や精子を長期保存して、ゲノム、ホルモンの情報から、最適な組合せを選んで繁殖する仕組みを作ろうとしている。日本固有のツシマヤマネコやヤンバルクイナでの取り組みを紹介したい。

**16：00　総合討論**

**17：00　閉会**

**司会**

山越　言（日本学術会議連携会員、京都大学アジアアフリカ地域研究研究科教授）

**コメンテーター**

則久　雅司（環境省担当者自然環境局野生生物課長）

岡ノ谷　一夫（日本学術会議連携会員、東京大学大学院総合文化研究科教授）

大沼あゆみ（日本学術会議連携会員、慶應義塾大学経済学部教授）

山極　壽一（日本学術会議連携会員、総合地球環境学研究所長）

中野　伸一（日本学術会議連携会員、京都大学生態学研究センター）

**申込み**　（2月23日（水）正午〆切）

https://docs.google.com/forms/d/11MyY54K0klUuVAeC-zkgTKNNkGxmaebufpzzDvL3sqE/edit?hl=JA

**問合せ**E-mail: ws-contact\*googlegroups.com （\*を＠に変更）